

午前中はゆっくりと過ごす。と言ってもジャーマン・アクセントと日本語風の片言英語の会話は緊張もある。彼女に洗濯をなさいといっても、「休暇中仕事はしない」とのことで一切をかばんに押し込んだままでいいと言うので仕方がない。

今日は午後から有隣堂に出かけて、イネスさんの恩師であるヴィンデ牧師が興味を持っておられる「西国 33 力所巡礼」に関する本を探すことになった。東京の丸善にもそれに関する英語の本はないとのこと。有隣堂で、観光旅行用の案内書なら、日本語で、写真入りの本が数冊あるとのこと、それを見に行ったら。数冊の中から 2 冊を選び、ヴィンデ牧師へのお土産として購入した。有隣堂は横浜最大の書店であるが、洋書は 6 階の 1 コーナーのみであった。イネスさんは鈴木大拙の「禅と日本の仏教」という分厚いペーパーバックの英書に関心を示された。読んでみたいとのことだったので、私がそれを彼女へのお土産にすることにした。綺麗な写真入りの仏教入門書も一冊添えた。彼女は大喜びしてくれた。



その後、野毛方面へ向かった。途中で横浜指路教会の前を通り、中に入った。ちょうど明日の礼拝の準備のため係の方がおられて、歓迎してくださった。オルガニストも練習中で、イネスさんにはお馴染みの曲で、嬉しそうだった。係の方の内、お一人がドイツで働いたことがあるということで、さっそくイネスさんと親しくお話をされた。

指路教会の現在の会堂は 1926 年に再建されたもので、パリのノートルダム大聖堂のゴシック様式と、それ以前のロマネスク様式の鐘楼が一本取り入れられている見事な会堂である。オルガンも 10 年ほど前に入れ替えた大型のものだ。指路をシロと読むが、英語では Shiloh と書き、これは旧約聖書の地名で、カナン侵入を果たしたイスラエルが最初に臨在の幕屋を立てた場所の名前であり、漢字の当て字を用いて命名されている。イネスさんにとって、教会堂の建築様式、また、教会の名前もお馴染みのものであった。

その後、今日のお目当ての「東アジア文化都市 2014 横浜～日中韓の伝統人形劇」観劇のため、にぎわい座に行った。まず、看板の招き猫に二人で笑い転げる。手の平を下にした猫はイネスさんには「あっち行け！」私には「こっち来い！」手の平を上すればイネスさんには逆になる。今日の演目、落語「寝床」、文楽「傾城阿波の鳴門～巡礼歌の段」が日本の伝統芸。落語の英語の抄訳を作ってみたが、滑稽味は伝わらない。文楽は義理と人情の狭間で苦悩する人間模様である。しかも浄瑠璃の語りは独特なものだ。品のいい人形の顔、渋い衣装、人形の繊細な動きは日本人好みなのだが、内容も悲劇的で、意味不明かもしれない。韓国の「パルタル」は仮面の顔と足を幕から出して、歌を歌いながら動かす。歌が主で、その内容は本当に庶民的な、ユーモラスなものだったし、韓国の誰でも知っている名所が歌に読込まれて親しみやすいが、人形の動きが単調で少なかった。最後の中国の「糸繰り」は実に分かりやすい。人形が沢山の糸で自在に操られ、目まぐるしい動きも鮮やかに決まる。人形の衣装の色彩は原色に金銀もついていて、華麗そのもの。やはり多民族国家の凄みかもしれない。横浜市長も一緒に観劇した。三国三様で、しかも初の競演とのことだった。劇が終わって、野毛の居酒屋で焼き鳥と麦酒を堪能する。彼女は焼き鳥が一番気に入ったそう。

